

中世を生きる

ちゆうせい

一九八三年六月二日 第一刷発行

著者——中野孝次

なかのこうじ

© Nakano Kohji 1983, Printed in Japan



発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京〇三—九望—二二（大代表） 振替東京一三二〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——藤沢製本株式会社

定価——一、三〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

目 次

直実と蓮生法師

5

阿弥陀よや、おいおい

——『発心集』と『一言芳談』の人びと

17

中世一婦人の手紙

——恵信尼消息

29

那須与一・実朝・文覚上人

41

『海道記』、『信生法師集』、『問はず語り』など

——鎌倉と文学（1）

54

実朝の歌

——鎌倉と文学（2）

66

義仲と『平家物語』

——鎌倉と文学（3）

78

乱世を歩く西行

——隠者と文学（1）

90

鴨長明

——ニヒルの底を覗いた意識家・隠者と文学（2）

102

徒然草

——隠者と文学（3）

114

法然と一枚起請文

——宗教者の言葉（1）

127

心のよくて殺さぬにあらず

——親鸞・宗教者の言葉（2）

139

日蓮の手紙

——宗教者の言葉（3）

151

ともはねよかくても踊れ

——一遍・宗教者の言葉（4）

163

日本文化の源流・中世

175

中野孝次

講談社

生

中

き

世

る

を

中生を生きる

装幀・平野甲賀

直実と蓮生法師

思いつくままこれから何回か中世人の顔とぼくの考えるものを描いてみようと思う。むろん、これが史実に確かな中世人の顔だと言いきる自信はまったくない。全部我流である。自分でも理由がよくわからぬまま中世という時代に惹かれたして、かれこれ十五年になる。そのあいだぼくなりいろいろな読んだり見たり調べたりした対象はかなりの数になるだろうけれども、関心の持ち方は実に自分勝手なものであった。興味のあるところばかり調べて来た。つまり制度史とか、政治史、政治思想、法制史、経済史、思想史といった類にはまるで興味がかわらず（読んで理解できない）、関心はもっぱら個々の人間の顔にしかむかわなかった。そのぼくなり興味を持った人物たちの顔をこの機会に描きつけておこうというのである。

ぼくは若い時分から四十までもっばら西欧近代文学にばかり親しんで来た者で、それが一九六六年から急に中世に惹かれたのはわれながら思いがけぬ成行きであったが、別に関心の的が変わつたのではなかった。問題はいつでも「今」という時を生きている人間にあった。ただ、「今」をみつめてみるとそのむこうにちらちらと中世が顔をのぞかせ、それが気になってならなくなりだしたというにすぎない。電車に乗っていても街の人混みを歩いていても、その顔を思い浮べると、現代人の顔がひどくアノニームなノッペラボウなものに見えだし、それにくらべあの連中はなんとしてかかりした^{まが}紛いのような面魂をしているか、と中世人のあれこれの顔が思いだされる按配なのである。そして、経済組織、交通機関、情報システム、生活の快適さなど、一言で「進歩」といわれるものは、はたして人間そのものにとって何であったか、などと柄にもなく考えだしたりする。つまりそんなふうに現代と対比させて姿を見せるのが、ぼくにとっての中世であり、その人間たちの顔だつたわけである。

ではどんなのがおまえの考える中世人の顔か、と短兵急にいわれても困る。それはときに顔とまで行かず、文献のあいだからちらちらのぞけるかれらのあるときの表情、身ぶり、空気のたぐいであるかもしれないのだから。たとえばぼくは、『愚管抄』のあるところこんな記述を見ると、そこからはずしもなく想像をかきたてられるたちの人間なのである。

「大雨ニテ有ケルニ。武士等ハレハ雨ニヌル、トダニ思ハヌケシキニテ。ヒシトシテ居カタマ
リタルコソ。中ノ物ミシラレン人ノ為ニハ。ヲドロカシキ程ノ事ナリケレ。」

一一九五（建久六）年、東大寺開眼供養のため頼朝が再度上洛したときの記述である。このとき

のことは『吾妻鏡』にはもっと精しく、先陣から後陣まで随兵の名まで一々記してあるが（畠山重忠、和田義盛以下ずらつと並んだその名前を見ただけでも想像をそそられるが）、かれらにとつては雨なぞ気にならぬのか、天候のことは「午以後雨頻りに降り」としか書いてない。が、九条兼実の弟である慈円和尚の目には、優雅に慣れた宮廷人らしく、東国武者の姿がそんなふうに見えたのだ。「大風大雨」の日だったと彼は書いている。その中で色とりどりの鎧（を着ていたのだろう）姿のままずぶ濡れになりながら「ハレハ雨ニヌル、トダニ思ハヌケシキニテ。ヒシトシテ」控えている連中の顔つき、目つきが、それに驚き威圧された宮廷人の表情までが、この文章から見えてくる。平将門以来ずつと大番のため京に出仕しながら、そのたびに「東がらすの鳴きあひたるやうにて」などと物言い振舞いの武骨さを嘲弄されてきた野蠻の東国人が、いま自分たちの手で歴史を転換させた、その力を自覚した顔が、この短い記述からも浮びあがってくる。そして、こういう地下人たちの力を自覚した時代が中世の始まりだったという気がするのである。「物ミシラレン人」たちの世ではなくなってきたわけだ。

同じそのかれらの面魂は『吾妻鏡』のいたるところに見出せる。ぼくは龍肅訳岩波文庫版の『吾妻鏡』をなんと読んだかしかないが、読むたびにこの本には興奮させられたものである。

一一八七（文治三）年といえ、平家滅亡、頼朝が鎌倉幕府をひらいて三年目、鎌倉中が新興の意気でむんむんしていたころだが、謀叛の疑いをかけられた畠山重忠が、梶原景時にむかって申しひらきしたときの言葉がのっている。

重忠のような勇士は、武力におごつて「人庶の財宝」を奪つて世渡りしていると疑われるのであ

れば恥辱ともしよう。が、謀叛を企てたといわれるなら、それはかえって名誉である、というのである。

「謀叛を企くはだてんと欲するの由風聞するは、還かへつて眉目と謂いひつ可し。」

すなわち、頼朝と自分の関係は契約による主従関係であつて、後世の朱子学的な意味での君臣の関係ではない、とはつきり言い切っているわけだ。つづけて重忠は「但し源家の当世を以つて武將の主に仰ぐの後、更にふたごころ式しきなし。」と言っているが、これも自分が関東のたばね役としてひとたび頼朝を主とすると決めた以上、自分への忠誠からも二心なぞあるわけがない、ということだろう。

それならその旨を起請文（熊野牛王くまのぎゅうおうの起請文であろうか）に書いて出せ、と景時がかさねて迫つたときの返事もいい。謀叛の疑そのものが架空なのだから出すわけにいかぬ、おれが二心ないと言つた以上二心はないのだ、その「詞ことばを疑うたがひて起請を用ひ給ふの条は、奸者に対する時の儀なり」、というのである。自主独立、自らを信じて誇り高くおのれを持つる人物の風貌が目のあたり見えるようである。こういう人間たちばかりぞろぞろいたのだから、やがて鎌倉幕府官僚が秩序をつくつてゆくためには、かれらを次々に殺さざるをえなかつたのかもしれない。

この自負と独立の気概と誇りとは、自分という人間への誇りに基いており、これはなにも重忠のような有力武將だけのものではなかつた。その同じ文治三年八月四日の記事には、鶴岡で放生会を行うにあたり、流鏑馬やぶさめの射手五人と的立て五人を発表したところ、的立て役に選ばれた熊谷二郎直実が憤然として抗議したことが記されている。

「御家人は皆傍輩なり、而るに射手は騎馬なり、的立ての役人は歩行なり、既に勝劣を分つに似た

り、此の如き事に於ては、直実嚴命に従ひ難し」と「鬱憤を含みて」言つたというのだ。係の役人がよわって、

「此の如き所役は、其身の器を守りて、仰付けらるる事なり、全く勝劣を分たず。」

と、的立ての役のご事来歴を説明して、射手より重い役だぞと言いふくめたが、どうしてもきかない。ために、その科よぶによつて、「所領を召分たる可き旨」の下知を受けることになつても、それでもうんと言わなかつた。

直実は『平家物語』一ノ谷の合戦の巻に記されたとおり弓矢をとつては「日本第一の剛の者」と自負している男である。その男が射手でなく的立てを命じられ、屈辱と怒りから憤然といきりたつたさまが見えるようで面白い。むろん彼には、「其身の器」に従つて仰せらるるなんてことはぜんぜん念頭になかつた。この「其身の器」とは、所領や身代の大きさの意味か、それとも人柄の意味か、たぶんその両方をふくめてだろうが、そういうこの世の位置のことなぞまったく考えず、なぜこのおれが、の憤りだけがあつたのだろう。わけ知らずといえばまことにわけ知らず、頑固といえば頑固一徹、おれが誇りにかけてもこれは引受けられぬ、というのである。直実は所領の小さな田舎武者で、頼朝旗上げのときの功により熊谷郷をもらつた者である。一ノ谷の合戦のときの、主従わずか三騎の命がけの先陣働きも、一匹武者の立場からしての必然的なものがあつたにちがいないのだ。身上の小ささへのひがみもあつたかもしれないが、それだけになおのことつぱっているのである。このとき直実は四十七歳だつた。『吾妻鏡』には、さらにその五年後建久三年十一月二十五日に、直実が久下権守直光と所領の境界のことで、頼朝の前で争つた話が出てゐる。(当時荒川は

熊谷郷の東北を流れ、久下領との境界になっていたが、名前どおりの荒れる川で、その流域がたえず変り、境界が変転定まらなかつたための争いである。)

一所懸命の言葉どおり、当時の争いで一番多く、かつ最も真剣に争われたのが、この境界についての訴訟である。二代目をついだ頼家などは、あまりにそれがややこしいので面倒くさくなつて、両者の境に筆で一本さつと棒を引いて決着をつけ、その乱暴な仕打ちのため御家人の人氣を失つた、と伝えられているくらいだ。直実とすれば生命をかえり見ぬ働きでやつと手にした所領である。さぞや必死の形相で御前に出たのだろうが、武勇はあつても彼は弁は立たなかつたようだ。

(ついでに言う。当時の鎌倉の武將らは筆も立たない連中ばかりだつたらしく、梶原景時追放のための連判状を書くにあたり、いざ書面をつくる段になるとだれもが顔を見合せるばかりだつた、という逸話が記されている。直実の書いたものが『鎌倉遺文』にのこされているが、これなぞもまさに判じもののような文章である。法然がさる人に与えた書状にも、「熊谷入道。津戸の三郎は。無智のものなればこそ。但念仏をばすすめたれ」とある。)

このときも、久下直光のほうは弁も立ち要領もいやつだつたようで、かねて梶原景時に委細を(むろん自分の有利なように)語つて了解をとりつけてあつたらしい。御前でも質問がくだるのはもつぱら直実にたいしてばかりである。だが、それにたいして焦れば焦るほど直実はきちんと答えられない。そのへんを『吾妻鏡』の筆者は、

「直実武勇に於ては、一人当千の名を馳すと雖も、対決に至りては、再往知十の才に足らず、頗る御不審を貽すに依りて、將軍家度々尋ね問はしの給ふ事あり。」

と記している。

再往知十とはよくわからないが、一を聞いて十を知るくらいの意味か。ともかく顔を真赤にして、頼朝の質問の意味もよくわからずおのが正しさばかり言い立てて、言えは言うほどしどろもどろになってゆく人物の顔が彷彿としてくる。世の中が落着くにつれ、規則や制度のこまごましたことに通じた景時のような官僚の人間が重用され、有利に立ち働く時代になっていたのである。おのれは正しいと信じながら次第に不利な立場に追いこまれた木強人ぼつきやうじんの憤怒のつってゆくのが見えるようだ。ついに我慢は限度に達した。

「えい、景時め、直光の肩ばかりもちおって。さてはあらかじめ殿にきやつの申し状こそ道理と申しあげておいたのだな。だからおればかりがこうもとちめられるのだろう。御成敗の趣きは聞かんでもわかった。かくては道理にかなった文書なぞあつたとてどうしようもあるものか。」

そう叫ぶなり、まだ事の決着がつきもせぬうちに、調度文書をくるくと巻くや御簾みすの前に投げ捨てて立ち上り、それでもなお憤怒に堪えず、西侍にかけこむなり、刀を抜いてわが手で髪をぶつ切り切り落としてしまった。そして、

「殿の御侍へ登りはて」

と、わけのわからぬことを口走って、南門に走り出し、そのまま「私宅に帰るに及ばずして逐電」してしまったというのだ。『吾妻鏡』は幕府の出来事を逐一記した公式文書だが、こういうところは人間の風貌形姿、心の動きが目のあたり見えるような書きっぷりである。

が、それにしても直実のこの一途さ、直情径行ぶりはどうであろう。裏も表もない。おのれが正

しいと信ずる以上、頼朝の前であろうと何であろうとかまわず信ずるままに言い、ただちに行動し、あとさきかまわぬ烈しきで爆発してしまう。実にはげしいものである。人間とはなるほどこういうものかと、現代社会のさまざまな約束事や関係のなかでじっと我慢して生きているわたしなぞは、その点にまず感嘆してしまうのだ。人間の全的発動というなら、直実の行動にはどの瞬間にもつねに彼の全部がいちどきに発動しているのが見えるようではないか。

直実は本当にそのまま京に上り、名を蓮生と改めて法然上人のもとで出家してしまったのだ。そのときの話が『法然上人行状画図』第二十七に出ている。法然が、「罪の軽重をいはず。たゞ念仏だに申せば往生するなり。別の様なし」と言うとき、直実はさめざめと泣き出した。しばらくその様子を見ていて、なぜ泣くのだと訊ねると、直実はこう言ったという。

「手足をも切り命をも捨ててこそ後生は助かるのだ、と仰せられるかと思っていたに、ただ念仏をしさえすれば往生すると承わって、有難くて泣けてきました」

そしてひとたび専修念仏の徒になると、ここでも直実はわき目もふらずひたすら念仏一途の間人となり、新黒谷の庵室にこもって、極楽往生へと直往邁進する。その翌年には、「ただひとへに人のために蓮生上品上生に生まれん」と途方もない悲願を起してしまう。つまり、自分一人があこの世に往生しても仕方ない、もう一度この世に戻って人びとを救済したい、そのためにはもう一度この世に来往しうる唯一の資格、上品上生をこそ得たい、九品九生のうちのあと「下八品」は不可来生だからそんなものはいらん、というのだ。恵心僧都でさえ下品上生を願った程度なのに、何とい